

4. 看護学部看護学科

4.1 理念・目標

4.1.1 教育理念

人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する。

4.1.2 教育目標

1. 豊かな人間性と倫理観を備えた人材の育成
人間の生命、生活を尊重し、人の痛みや苦しみを共に分かち合える温かい心、豊かな人間性と倫理観を備えた人材を育成する。
2. 看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材の育成
看護専門職として必要な知識、技術を修得し、人々の健康と生活に関わる諸問題に対して、科学的な根拠に基づく判断力と問題解決能力及び看護学研究に関する思考力と創造性を涵養し、看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材を育成する。
3. 調整・管理能力を有する人材の育成
保健・医療・福祉等について総合的視野を持ち、関連分野の人々と連携・協力して行われる看護実践を通して、調整・管理能力を有する人材を育成する。
4. 国際社会でも活躍できる人材の育成
国際的な視野から、健康問題や看護問題を思考、判断し、国際社会でも活躍できる人材を育成する。
5. 将来の看護リーダーの役割を担う人材の育成
社会状況の変化を踏まえ、看護が担うべき役割を展望し発展させるため、自らの研鑽を重ねながら、その資質向上に努め、看護学の発展に寄与し、将来の看護リーダーとなることができる人材を育成する。

4.1.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

入学者選抜試験として、一般入試（「前期日程」「後期日程」）、推薦入試、社会人入試を実施し、以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を幅広く求めています。

1. 大学で学ぶ上で必要とされる基礎学力を身につけている。
2. 人間や生命に関心を持ち、保健・医療・福祉分野で活躍・貢献したいという目的意識を持っている。
3. 周囲の人と協力して物事を進めることができる。
4. 他の意見に耳を傾け、自分の考えを表現できる。
5. 自己学習・自己啓発を継続する意欲がある。

4.1.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

教育理念・教育目標を受け、以下のような方針に基づいてカリキュラム（教育課程）を編成している。

1. 看護職として必要な豊かな人間性と倫理観を育成するために、人間科学領域の科目と看護専門領域の科目を統合して学べるように、両者の科目を並行して配置する。
2. 看護職として必要な知識・技術およびそれらの科学的根拠を学ぶことができるように、看護専門領域の科目を健康・疾病・障害の理解、看護の基本、看護援助の方法、看護の実践、看護の発展の順に配置する。
3. 多様な場での多様な対象の健康レベルにあわせた看護実践能力を身に付けるために、人間の成長・発達段階別、健康の維持増進期から終末期にいたる健康段階別、施設内・地域・在宅という看護の提供場所別の看護を段階的に学べるように設定する。
4. 個人・家族・組織・地域の健康課題を解決する能力を育むために、大学の位置する石川県、能登地域を題材にして、文化や自然・暮らしを学ぶ科目、地域の保健・医療・福祉を学ぶ科目、地域の課題を解決しながら学ぶ科目を配置する。さらに、他の地域への応用力を養う看護専門領域の実習科目を配置する。
5. 複雑な状況に対応する能力と、多職種と連携・協働しながら看護の専門性を発揮できる能力を育むために、統合科目を設定する。
6. 将来の多様なキャリア発展の可能性を涵養するために、国際看護、看護マネジメント、政策形成に関連する科目を配置する。
7. 生涯学習能力を養うために、自学自習や討論する機会を積極的に取り入れる。

4.1.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

卒業までに所定の単位を修得し、看護の基盤を備え、個人・コミュニティ・社会の健康課題の発見と解決に貢献するために、様々な知識や技術を応用し援助する能力と、社会の要請に応じて新たな知識や技術を探求し創造していく意欲や能力を有する者に、学士（看護学）の学位を授与する。

このような能力を修得するためには、以下の学習成果をあげることが求められる。

1. 看護の対象となる人の人権を尊重する姿勢や共感的態度を通して援助関係を形成できる。
2. 人の命や暮らしを理解し、健康課題を科学的根拠に基づいて総合的にアセスメントし、課題解決に向けて適切な看護が実践できる。
3. 保健・医療・福祉等について総合的視野を持ち、関連分野の人々と連携・協働することが理解できる。
4. 看護専門職としての価値観・専門性を生涯にわたり発展させる素地を身につける。

4.2 学部学生の入学・在学・卒業の状況

(1) 入学の状況

①入学定員・収容定員

単位（人）		
入学定員	3年次編入学定員	収容定員
80	10	340

②試験実施日

実施日	
推薦入試・社会人入試	平成29年11月18日（土）
一般入試前期日程試験	平成30年 2月25日（日）
一般入試後期日程試験	平成30年 3月12日（月）

③受験状況等

	単位（人、倍）							
	募集定員	志願者数	志願倍率	受験者数	受験倍率	合格者数	実質倍率	入学者数
	A	B	B/A	C	C/A	D	C/D	
推薦入試	30	58	1.9	58	1.9	30	1.9	30(30)
社会人入試	若干名	3	—	3	—	1	3.0	1(1)
一般入試前期	40	139	3.5	130	3.3	44	3.0	41(36)
一般入試後期	10	176	17.6	59	5.9	12	4.9	11(10)

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

(2) 在学の状況（平成30年3月1日現在）

単位（人）						
学 年		1年次	2年次	3年次	4年次	計
在学者数	男性	5	5	4(1)	8(0)	22(1)
	女性	80	78	86(6)	83(5)	327(11)
	計	85	83	90(7)	91(5)	349(12)

（ ）の数字は内数であり編入学者の数を示す

(3) 卒業の状況

①卒業者数 第15期生

単位 (人)

区 分	計	入学年度別卒業者数		
		平成25年度以前 入 学 者	平成26年度 入 学 者	平成28年度 編入学者
卒業者数	81(76)	2(2)	74(69)	5(5)

() の数字は内数であり女性の数を示す

②卒業後の進路状況 第15期生 (平成30年3月31日現在)

単位 (人)

区 分	県 内		県 外		合 計		
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
就 職	看護師	48	59.3%	16	19.8%	64 (59)	79.0%
	国公立病院 (独立 行政法人を含む)	38	46.9%	7	8.6%	45 (41)	55.6%
	上記以外の病院	10	12.3%	9	11.1%	19 (18)	23.5%
	保健師	3	3.7%	2	2.5%	5 (5)	6.2%
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0 (0)	0.0%
	計	51	63.0%	18	22.2%	69 (64)	85.2%
進 学	大学院博士前期課程	4	4.9%	0	0.0%	4 (4)	4.9%
	養護教諭特別別科	4	4.9%	2	2.5%	6 (6)	7.4%
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0 (0)	0.0%
	計	8	9.9%	2	2.5%	10 (10)	12.3%
未 定		1	1.2%	1	1.2%	2 (2)	2.5%
合 計		60	74.1%	21	25.9%	81 (76)	100.0%

() の数字は内数であり女性の数を示す；割合は、総数81人を100%としたもの

③主な就職先 第15期生 (平成30年3月31日現在)

県 内	県 外
石川県立中央病院	富山県立中央病院
金沢大学附属病院	富山大学附属病院
金沢医科大学病院	砺波総合病院
国立病院機構 金沢医療センター	高岡市民病院
金沢赤十字病院	福井大学医学部附属病院
公立松任石川中央病院	名古屋第一赤十字病院
公立穴水総合病院	聖路加国際病院
金沢市立病院	三井記念病院
公立能登総合病院	新百合ヶ丘総合病院
JCHO金沢病院	国立循環器病研究センター
市立輪島病院	近畿大学医学部附属病院
珠洲市総合病院	岐阜県岐南町、長野県高山村保健師 など
石川県保健師	
輪島市、能登町保健師 など	

4.3 教育・履修体制

本学の教育は、人間科学領域の5学科目群と看護専門領域の5講座に属する教員が担当します。

領域	学科目群又は講座	科目群	教育内容
人間科学領域	人間形成系群	健康体力科学	自己の健康・体力づくりを生涯にわたり実践していくための理論と方法を修得させるとともに、看護の対象者の健康獲得を目指すための知識と技術について教授する。
	人文科学系群	哲学	哲学・心理学的な思考を通して、人間の本質と存在の意義について理解を深めるとともに、看護職者として悩める人を理解し援助するための知識と方法、態度について教授する。
		心理学	
	社会科学系群		人々の生活を支える社会のしくみと人間と社会環境との関わりについて理解を深めさせるとともに、社会科学的視点から保健・医療・福祉・看護が抱える諸問題について教授する。
	自然科学系群	人間工学	人々の生活と環境との関わりや人間と環境との共生について理解を深めさせるとともに、人間の日常生活行動や看護現場での諸問題について人間工学的側面から教授する。
国際・情報科学系群		英語	国際的な視野から健康や看護問題を思考、判断し、国際社会でも活躍できる思考力と語学力を教授する。また、高度情報社会に対応できる基礎力と看護情報の統計処理能力を教授する。
		情報科学	
看護専門領域	健康科学講座	機能・病態学	人間の生命現象や身体の構造・機能と心身の健康の保持・増進、疾病・障害の発症と回復のしくみに関する理論と知識、技術を科学的根拠に基づいて系統的に教授する。
		保健・治療学	
	基礎看護学講座	基礎看護学	「看護とはなにか」という看護の概念・本質と看護の基本となる理論と知識・技術、及び看護職者として必要な態度について教授する。
	母性・小児看護学講座	母性看護学	ライフサイクルのうち、妊娠・分娩・出産から思春期にわたる母子とその家族に特徴的な発達課題と健康問題を踏まえ、看護援助に必要な知識や理論と実践の方法について教授する。
		小児看護学	
	成人・老年看護学講座	成人看護学	ライフサイクルのうち、成人期から老年期にわたる対象に特徴的な発達課題と健康問題を踏まえ、看護援助に必要な知識や理論と実践の方法について教授する。
老年看護学			
地域・在宅・精神看護学講座		地域看護学	地域で生活する個人・家族・特定集団・地域住民全体を対象とした地域看護の特徴を踏まえ、活動の場(学校、職場、在宅、地域全体)とその対象の特性に応じた看護援助、及びライフサイクル各期のメンタルヘルスの課題や精神的な健康問題をもつ対象への看護援助に必要な知識や理論と実践の方法を教授する。
		在宅看護学	
		精神看護学	

4.4 委員会活動

4.4.1 常設委員会

4.4.1.1 教務委員会

委員長：村井 嘉子（教授）

委員：長谷川教授（学生部長）、林教授、垣花准教授、中田准教授、木森准教授、米田准教授、北山准教授、織田准教授、谷本准教授、金谷講師、中道講師、寺沢教務学生課長

委員補助：曾山助教、大西助手

事務局：山岸専門員

活動内容：

1. フィールド実習において、課題解決型学習（学生が地域に出て自ら課題を発見し、解決策を提案すること）を継続することで、地域に関する理解を深めるとともに広い視野と人間性の育成を図った。

フィールドワークを通して地域の人々の暮らしや仕事、生活文化、環境を理解する事と共に、スタディ・スキルをゼミの事前学習や現地実習で活用することを意識した結果、実習先での聞き取り調査や質問紙調査を実施したグループが増加した。これによって地域の暮らしを理解するための基礎力を使って思考力を鍛え、自らのフィールドワークを通して実践力を育み、自らの学習課題を明らかにすることができたと考えられる。

2. 「フィールド実習」科目に初年次教育の試みを継続した。

学生のレポート添削や他授業との関連においてレポートの記載形態、論述内容において発展的成果が見られ、また、学生からは大学生として重要で基本的な事柄が学習できたと言う反応が聞かれた。今後、これらの学修内容が定着し学びを進め、深める状況になっているかを追視していく必要がある。

3. 様々な科目や活動（フィールド実習、表現学、看護学演習、看護学実習、卒業研究等）において、自身の学びをまとめ、それを他者に伝え、その反応や評価を得て改善していくことで、プレゼンテーション能力向上の試みを継続した。

フィールド実習報告会は6月21日、ヒューマンヘルスケア報告会は4月5日及び6月21日に実施した。フィールド実習報告会では、各ゼミでの意見交換によって浮かび上がった疑問点について自分で調べ、それを基に実習を通して明らかにすべき内容を実習計画に掲げた。当初の疑問や課題、その結果を発表会で報告し他のグループの仲間より意見を聞いた。また、ヒューマンヘルスケアにおける発表では、海外研修、学童期において学習に課題のある子ども達への学習支援を通して、自分自身の学びや経験、人との関わりの体験の蓄積によって学びを深めたこと、学生個々の取り組みを通して当初の課題から状況理解を深め、自己成長と学びに繋がった報告が多数あった。

4. 異学年の学生グループによるサークル活動や地域ケア総合センター等における実践活動を通して、自主的な問題解決能力や行動力を育むことに努めた。

宝達志水町特定健診・がん検診での骨密度測定（6月18日）、宝達志水町健康づくり推進員研修会での骨密度測定（8月23日）196名参加、かほく市民体力テスト（10月19・20日）に学生を引率し、地域住民との交流を行いながら、地域の人々の健康チェック、健康への動機付け関わりを行っている。保健医療職として人との関わり方、住民の多様性を学び、考える機会となっている（大学HPで公開している）。

5. 各実習科目において市町・保健所・医療機関等との実習指導者と連絡・協働し、看護現場の実態に即した教育を実践する。また、引き続き実習指導者会議を開催した。

保健師教育課程における地域看護学実習について、実習指導者との意見交換を平成28年11月28日県庁会場、及び能登空港会場の2ヶ所において実施した。県庁会場では9施設10名、能登空港会場では5施設5名が出席した。また、産業看護学実習報告会では5施設6名の出席があった。教育方法として地域と職域の関連について具体的なモデル事例を提示し、その展開を学習する、そのモデル事例について考察する視点について教授する等に取り組んだ。この取り組みによって考察内容が深まる傾向が見られた（単年の取り組みでは成果判定は難しい）ことより、今後も継続する。

6. 臨床教授等の任命を継続し、臨床実習をさらに充実させるとともに、看護現場の実態に即した教育を行った。

本学教員と臨床教授等称号付与者との意見交換会を2月21日に実施した。昨年度の意見交換会で出された現場の課題に対するその後の取り組みについて意見交換を行った。また、本年は同日に千葉大学教育センター長 舟島なをみ教授を招聘して『看護学実習再考』をテーマに教育講演会を行った。Ⅰ部意見交換会には77名、Ⅱ部教育講演会には95名が参加した。

7. 英語教育充実に取り組んだ。

授業の中でTOEIC公開テストの予告、また定期・随時試験においては音声を重視した試験を取り入れている。今年度報告のあったTOEIC受験者は、昨年同様5名であった。報告はないが、他にも受験者はいることが推測される。TOEIC受験料が5000円であることが、受験において高いハードルとも考えられる。学生のTOFELやTOEIC等受験支援として、授業外で英語の英語試写会、TOEICのミニ模試等を検討している。

8. 学内カリキュラム改訂班による会議を充実させ、カリキュラム改訂の基本方針や現行カリキュラムの課題抽出および対応策を検討し、新たなカリキュラム策定作業を実施した。

開学後16年が経過して、当時は斬新であった教授内容（科目）がスタンダードとなり、経年的に教授時期が早くなることで科目の学年配当の時期、それらの内容について修正が必要になっている。また、科目間の重複が一部みられること、本学の学生気質を考慮することで、科目の配当年次の再検討、統合実習の在り方、教授内容について修正が必要であることが明らかになった。現在、次年度の早い時期をめざして、重複内容、検討すべき内容と科目を抽出する作業を継続している。

9. 今年度入学生より成績評価方法（GPA制度）を導入し、学生個人の成績、学年集団の学修状況を客観的に把握できるようになった。次年度も継続し学内全体の教育評価につなげる予定である。

4.4.1.2 学生委員会

委員長：長谷川 昇（教授（学生部長））

委員：松原教授、亀田教授、木森准教授、岩城准教授、織田准教授、桜井准教授、市丸講師、米田准教授、林講師、三部講師、寺沢教務学生課長

委員補助：子吉助教、三輪助手、渡辺助手

事務局：納橋専門員

活動内容：

1. 学修意欲の向上・学修支援の充実

- 1) 学生表彰：H28年度は、開学記念式典と卒業式において、それぞれ団体と個人を対象とした学長表彰を行った。H29年度も引き続き、開学記念式典では、第16回「利家とまつ」金沢城リレーマラソンにて上位の成績を獲得した駅伝サークルの活動に対して、学長表彰を行った。卒業式では、成績優秀者と災害ボランティアサークル、サービ斯拉ーニングの活動、津幡町での地域活動、障害者スポーツ活動において、中心的役割を果たした7名を表彰した。H30年度も同様に、成績優秀者や社会貢献などにおいて模範となった団体や個人を表彰することにより、勉学や地域活動などに対する意欲の向上を図る。
- 2) 学修環境の整備：H28年度は、Wi-Fi環境の必要性和PC環境に対するニーズ調査の結果に基づき、大講義室、食堂、図書館にWi-Fi環境を整備し、食堂の喫茶コーナー前にラーニング commons の設置を行った。H29年度は、上述した整備の認知度と利用状況に関する調査を行った。その結果によると、ラーニング commons の利用者は、全体で17.5%と少なかつたため、これらの利用可能な時間や届出方法について検討を開始した。次年度も引き続き、利用状況を改善する方策について検討していく。大学生活に関するアンケート結果によると、大学祭の運営は、主に1、2年生で行われており、進級するに従って参加率が低下していることから、大学祭の企画・立案に対する助言が必要であり、H30年度も学生委員会として引き続き支援する。

H28年度に引き続き、自治会との座談会を行った。その結果、休日の登校、休講の連絡、Wi-Fi使用範囲の拡大、トイレの荷物台設置、パソコンの不具合などについて要望が出された。これらの要望については、委員会で検討を重ね、改善案などを自治会に提案していく予定である。

2. 自学自習能力と自立的な判断力・行動力の育成

- 1) 異学年・卒業生との交流：H28年度は、新入生歓迎会、学習ガイダンスを通し、異学年交流を実施してきた。H29年度も引き続き、3年生が主体となり、4年次の臨地実習に関するアドバイスを聞く目的で、学生セミナーが行われた。卒業生との交流では、開学記念式典において全体交流会を実施した。それぞれ1期から10期までの卒業生に在学時の勉強方法、現在の仕事、育児と仕事の両立についての講演をお願いし、質疑応答を行った。3月には、卒業生を招き、進路決定までの過程や体験談を聞く目的で3年生を対象とした座談

会を実施した。H30年度も引き続き、学生が早期にキャリアイメージを形成できるよう、全学生を対象とした学生セミナー等を開催し、卒業生との交流の機会を設ける。

- 2) 自治会・課外活動への助言：H28年度は、自治会・課外活動・大学祭において学生の自主性を重視しながら自律的に意思決定するように促してきた。H29年度も引き続き、これらの方針を踏襲し、10月28日（土）・29日（日）に、「RENCONTRE（ランコントル）～学生と地域の輪に咲く笑みの花～」と題して大学祭を開催した。準備段階からの支援として、学生委員の中でも自治会・サークル活動担当教員が中心となって、大学祭の企画・立案の会議に同席して助言を行った。本年度の試みとして、講堂をメインステージにして大学祭を開催した。

3. 幅広い教養を深める機会の提供

- 1) 石川コンソーシアムの活用：H28年度は、コンソーシアム石川の活動を紹介し、参加を促した。H29年度も引き続き、入学式ガイダンスや、各学年のガイダンスにおいて、シティカレッジでの単位取得やグローバル人材育成プログラムについて参加を促した。ステップ1の民泊型フィールド実習に本学学生18名が参加した。ステップ3の韓国全北大学研修(3月)に、本学学生11名が参加した。本学教員が講師を務める、シティカレッジでの単位取得者は、前期1名、後期2名で、いずれも社会人であった。
- 2) 外部講師による出前講座：「賢い消費者塾」やチラシ配布などを行い、幅広い教養と学生生活が安全に送れるよう支援した。

4.4.1.2.1 学生相談専門部会

部会長：長谷川 昇（教授（学生部長））

部会員：武山教授（附属地域ケア総合センター長）、川端助教、大江助教、三輪助手、
寺沢教務学生課長、井上囑託

活動内容：

1. 学生支援体制の整備：

- 1) 学生への周知：H28年度に引き続き、リーフレットを活用した学生への学生支援体制の周知を行った。具体的には、学生委員会委員、各学年担任・副担任、学生相談部会員、ハラスメント相談員の研究室と内線番号、保健室担当者と事務担当者の部屋番号と内線番号を記載した「学生支援教職員相談窓口」のリーフレットを4月のガイダンス時に配布し、学生のメンタル面と健康管理の支援を強化した。保護者に対しても、入学時に本体制を説明した。H29年度は、学外からの相談に対して、守秘義務を遵守するために保健室に外線を設置した。
- 2) 学生の相談状況の把握：H28年度に引き続き、保健室教員にも学生相談専門部会に所属してもらい、修学上で課題を抱える学生の保健室での相談状況について把握し、学生相談専門部会員間での情報共有を行った。また、学生相談専門部会員には、実習担当教員も含まれており、臨地実習に課題を持つ学生を把握し、情報を共有した。さらに必要に応じて、学生委員会で修学上課題抱える学生の情報共有も行った。
- 3) SOUDAN LABO：H28年度に引き続き、学生相談専門部会員がオフィスアワー時間を提示し、学生のメンタル面での相談に応じる体制を整えて周知してきた。しかし、H28年度におけ

る実際の相談件数は皆無であった。そこで、H29年度は、先輩からのアドバイスを聴く機会やお互いの悩み事について相談できる場を提供した。第1回は「看護大生の生活情報」(9名参加)、第2回は「試験に向けての勉強のやり方」(9名参加)、第3回は「コミュニケーションについて～基礎実習に向けて～」(8名参加)、第4回は今後のあり方やこれまでの活動に対する感想を聞いた(8名参加)。第5回は、大雪のため開催できなかった。学年や性別に関係なく、学生同士が話しやすい雰囲気を作り、互いの行動を振り返る機会を設け、客観的な自分を知ることは有用であるため、今後も学生が学生を支援するピア・サポート活動を推進していきたい。

4.4.1.2.2 進路支援専門部会

部会長：織田 初江(准教授)

部会員：丸岡教授(学長補佐兼附属看護キャリア支援センター長)、岩城准教授、桜井准教授、米田准教授、金谷講師、中道講師、川村講師

活動内容：

1. 進路支援

- 1) 4年生に対する進路支援活動は、28年度までの成果を踏まえて、8名のアドバイザー教員による担当制で行った。主たる支援内容は、進路決定への助言や情報提供、履歴書の書き方や面接への助言、小論文の添削等の就職・進学等への助言・指導である。結果、81名中、健康問題により就職を見合わせた1名を除き、全員が就職先の内定や進学先の合格を得た。
- 2) 同窓会との連携により、卒業生の交流会を開催し、新4年生に対して、具体的な就職・進学先の情報を生の体験談とともに得て、進路の希望の具体化を助けるように支援した。
- 3) 早期から看護職としての職業像を描けること、看護職として長く働き続けられることを目的に、全学年への支援を視野に開学記念日に合わせて、同窓会との連携のもとに、看護職として働く先輩たちの体験談に、結婚や出産体験と看護職としての働き方についてを加えて語ってもらうように取り組んだ。

進路支援活動としては、クラスアワーなどを利用して、保健師などの公務員試験を必要とする進路希望者への試験対策に加えて、2、3年生にも早期からのインターンシップ等への参加を促し、将来の職業像を描く助けとなるように、情報の入手方法や申し込み・参加時の注意事項などについて説明を行った。

また、県の人事担当者から県職の保健師採用試験について、希望する学生が直接説明を聞く機会を設けた。

2. 国家試験対策

- 1) 8名のアドバイザーが担当学生の学内の模擬試験結果等を基に、得点の伸び率等を確認しながら個別指導を行った。29年度は、個別指導を強化するため、4月の初回面接に加えて、9月末に、第1回目の学内模試の結果をもとに、学習の進捗状況を確認しつつ、国家試験対策への支援を行った。また12月から1月にかけて、再度必要者を中心に4年生への面接を行い、国家試験合格に向けて支援の強化を図った。

結果、看護師国家試験の合格率は98.7%(全国平均96.3%)、保健師国家試験は82.7%(全

国平均85.6%)であった。看護師試験の不合格者1名に対しては、引き続き、進路アドバイザーおよび教務学生課が支援を図る予定である。

- 2) 学生の希望を基に、夏期休暇期間に疾病障害論、12月～1月に保健師国家試験対策のために補講を行い、学生の基礎的な理解力の強化を図った。ただし、冬期期間の出席者は20～35名と少なく、保健師の合格率は全国平均を下回り（前述）、今後課題を残した。

一方、保健師職としての就職希望者は全員保健師の資格を取得しており、保健師資格への強い動機づけが、なお一層必要ではないかと考える。

- 3) 29年度の国家試験の結果を踏まえて、29年度と同様、4年生には、試験対策への動機づけの強化と、勉強方法へのヒントを得る機会を拡大するため、30年度の4月ガイダンス期間に、試験対策業者による無料出張講義を行う予定である。また、3年生への国試対策への基礎知識の強化を図るため、最も動機が高まる3年後期の実習前に、業者による出張講義（費用は学生の自己負担）を検討している。

- 4) 29年度は、保健師国家試験の合格率が全国平均を下回る結果となったが、不合格となった学生の6割弱は、1月時点での看護師模擬試験の得点率が伸びず、看護師資格の取得に絞らざるを得ず、保健師国家試験の合格に至らなかったと考えられる。

また、近年の保健師教育は、多くの大学等で選択制が導入されており、受験者自身が事前に成績優秀者に絞り込まれている傾向が高く、本学のように全学生に保健師資格までの取得を目指している大学においては、相対的に全国平均よりも合格率が低くなりやすい。

4年次の多重課題に対して、優先順位を適切に判断し、計画的に学習する習慣を身につけていくように、低学年時からの学生への支援方法を検討していく必要がある。

4.4.1.3 研究推進委員会

委員長：大木 秀一（教授（4月～5月））、今井 美和（教授（6月～3月））

委員：村井教授、桜井准教授、米田准教授、林講師、三部講師

委員補助：田淵助教、千原助教

事務局：細川専門員

活動内容：

1. 研究推進に係る会の開催

1) ウェルカムセッション&ワシントン大学研修報告会

開催日時：平成29年5月24日(水) 16:20～17:30 参加者：34名

場所：管理棟1階 地域ケア総合センター研修室

内容および講師：

「LGBT家族の研究から見てきたもの—社会学の観点から—」

三部倫子講師（人間科学）

「ワシントン大学での研修報告」

加藤穰准教授（人間科学）

2) 研究サポート集会

【1回目】

科学研究費補助金や受託研究費をはじめとする外部研究資金獲得に向けて、専門業者による研修会を実施した。

対 象 者：教員および大学院生

開 催 日 時：平成29年7月19日(水) 15:00 ~ 16:30 参加者：51名

場 所：教育研究棟1階 大講義室

内容および講師：

「効率的な研究計画調書の構築法を理解する」

「戦略立てに必要なデータとツールの活用を理解する」

ロバスト・ジャパン株式会社

【2回目】

対 象 者：教員

開 催 日 時：平成29年9月22日(金) 11:30 ~ 12:00 参加者：37名

場 所：教育研究棟2階 中講義室4

内容および講師：

「科研費申請に関する事務的伝達事項」

平村主任主事(事務局)

3) 平成28年度学内研究助成成果報告会の開催

今年度初めてポスター発表形式で実施した。13課題の発表がなされた。

開 催 日 時：平成29年8月4日(金) 13:30 ~ 15:30 参加者：46名

場 所：管理棟1階 地域ケア総合センター研修室

4) 石川県立大学との合同研究発表会の開催

石川県立公立大学法人2大学の学術交流を目的とした研究発表会を実施した。また同時にFD研修会も開催された。

開 催 日 時：平成29年8月8日(火) 15:30~18:05 参加者：41名(本学関係者)

場 所：ANAクラウンプラザホテル金沢 3階 「瑞雲」

演題・講師：

「周産期のグリーフケアに関する研究

～ 流産・死産・新生児死亡で児を亡くした母親・家族へのケア ～」

米田昌代准教授(母性看護学)

「金沢市近郊のクマの生息実態を探る」

大井徹教授(石川県立大学 環境科学科)

「MUA記録法を用いたラット生殖中枢の活動解析」

市丸徹講師(健康科学)

「ビフィズス菌におけるオリゴ糖トランスポーターの機能解析」

阪中幹祥助教(石川県立大学 腸内細菌共生機構学)

2. 研究活動活性化のための実態調査

教員の研究時間確保のため、教育と研究の両立に向けた体制整備を検討することが必要である。そこで、教員個々の研究活動・成果の公表を阻害する要因を把握し、その対策を検討するために、「研究活動を遂行する体制整備のための実態調査」の無記名自記式質問紙調査を行った。

対 象 者：教員

調 査 期 間：7月3日（月）～7月9日（日）

回収率は77%であった。職位、実習期間に関わらず講義演習と大学運営（委員会業務）の活動が多くなされ、研究時間の捻出が課題になっていた。

助教・助手においては、7割前後の者が研究能力不足や研究以外の業務の負担、ワークライフバランスの難しさが自己の研究を妨げていると回答し、研究促進のための工夫ができていないと回答した者が8割近くであった。そこで、助教・助手の研究促進の取り組みが重点課題として挙げられた。

3. 大学全体の研究業績評価

平成29年度外部資金獲得件数については、科学研究費補助金は22件（平成29年度10件採択）、受託研究費等の外部資金獲得件数は4件（すべて29年度採択）であった。また、平成30年度科研費申請割合は、平成29年度と比較して増加していた。次に、平成28年度年報に掲載されている業績（著書・学術論文・学術発表）数を調査したところ、平成28年度業績数は平成27年度と比較して、書籍は増加、筆頭の学術論文（査読あり）は減少、筆頭の学会発表は国内についてはやや増加、国外は同様であった。

4.4.1.4 学内研究助成審査委員会

委 員 長：大木 秀一（教授（4月～5月））、今井 美和（教授（6月～3月））

委 員：小林教授、長谷川教授（学生部長）、丸岡教授（学長補佐兼附属看護キャリア支援センター長）、瀧教授

事 務 局：細川専門員

活動内容：

本委員会は、学内研究助成全般のあり方の検討と実際の学内研究助成に関する申請書類の審査、報告書の評価、予算案の提案を主たる活動とする。

平成29年度は3回の委員会を開催し、研究成果公表の申請がある場合は随時審査を実施した。平成29年3月に平成29年度学内研究助成（研究プロジェクト）の2次募集を行い、平成29年4月の委員会で4件の課題を採択した。また、平成29年12月には平成30年度学内研究助成（研究プロジェクト）の1次募集を行い、平成30年2月の委員会で7件の課題を採択した。その他に、平成29年度の研究成果公表助成6件（海外渡航費助成3件、学術論文等掲載費助成3件）を採択した。平成30年度に開催される学会に対する学会開催助成の申請はなかった。

4.4.1.5 石川看護雑誌編集委員会

委 員 長：小林 宏光（教授）

委 員：長谷川教授、牧野教授（研究科長）、中田准教授

委員補助：松本助教、大江助教

活動内容：

石川看護雑誌第15巻の編集を行った。総説1編、原著論文6編、資料4編、特別報告2編の計12編の論文を掲載した。本年度は論文投稿区分の変更など投稿規定を大幅な変更を行った。

4.4.1.6 情報システム委員会

委員長：谷本 千恵（准教授）

委員：加藤准教授、米田准教授、市丸講師、林講師

事務局：杉本主任主事（松田総務課長、平村主任主事）

開催頻度：随時

活動内容：

本委員会は本学情報システムの管理・運営、および本学における情報環境の改善を担当している。

1. 新任教職員に対する情報システムの説明（事務局）

4月の新任教職員オリエンテーション時に学内ネットワークシステムの概要とメール設定方法についての説明を行った。

2. 石川県公立大学法人情報ネットワークシステム保守委託業務の作業実績報告会議への出席（委員長、事務局平村主任主事）

開催日：4月14日（金）、7月18日（火）、10月18日（水）、2月16日（金）

開催場所：石川県立大学

石川県立大学と合同で石川県公立大学法人情報ネットワークシステム保守委託業務の作業実績報告を受け、その際に法人本部・両大学・業者の間で意見交換を行った。

3. 情報システムに関する事項の教職員への周知

1) Zドライブ空き容量確保の作業について

7/28 一斉メール（情報システム委員会・事務局総務課）

2) 情報システム機器等更新に係る要望調査・法人本部との調整

8/4 教員全体会議で説明（情報システム委員長）、一斉メール送信（情報システム委員会・事務局総務課）

法人本部との調整（事務局・総務課）

4. 情報システム委員会 3月2日（金） 10:40～11:30

活動報告とまとめ、次年度以降の予定について

4.4.1.7 広報委員会

委員長：川島 和代（教授（兼学長補佐））

委員：武山教授（学長補佐兼附属地域ケア総合センター長）、長谷川教授（学生部長）、丸岡教授（学長補佐兼附属看護キャリア支援センター長）、濱教授（国際交流委員長）、西村教授（附属図書館長）、牧野教授（研究科長）、中田准教授、出村事務局長

委員補助：山崎助教、千原助教、瀬戸助手

事務局：宮川主任主事

活動内容：

1. 委員会開催

年6回開催、広報戦略について大学の役職者らによる提案を活かした広報活動を検討した。

2. オープンキャンパス

1) 第18回 平成29年度 オープンキャンパス2017の企画立案・準備・実施

夏：開催日時 平成29年 7月15日（土）10：00～14:00 参加者393名

看護系の実習室、スキルラボ、人間機能学実習・実験室の紹介を企画した。それぞれの領域・講座において例年とは異なる新企画を工夫して授業風景を紹介した。

相談コーナーは例年同様、学生主体で企画した。

秋：開催日時 平成29年10月28日（土）9：30～12:00 参加者107名

例年同様、大学紹介と入試準備セミナーを実施した。

2) 第19回 平成30年度（2018年）オープンキャンパスの検討

日程 夏 平成30年7月14日（土）、秋 10月27日（土）午前 開催予定

3. キャンパスネット IPNU（大学新聞）

1) 第32巻 2017. 10の企画立案・編集・発行

メインテーマは石川県立看護大学の国際交流事業&助産師養成課程新設のキックオフ事業『日中韩看護フォーラム』を取り上げた。また、開学記念行事や新たな学生サークル（演劇サークル・子育てボランティアひよっこ等）の紹介、認定看護師として活躍し始めている卒業生にインタビューした記事をトピックスとした。

2) 第33巻 2018. 3の企画立案・編集・発行

メインテーマは国際貢献事業「石川県立看護大学が取り組む国際貢献：JICA北陸採択事業青年研修」とし、タイ王国から見えた14名の研修生の研修の様子を取り上げた。また、新石川県立中央病院探訪においては新築された石川県立中央病院で実習している学生の様子、北國健康生きがい支援事業で教員の研究・社会貢献の公開講座などを取り上げて掲載した。

4. ホームページの充実

1) ホームページの運用・・・昨年に継続して各委員会や事業担当者の中でHP担当を定め、随時事業内容をHPアップに努めた。

2) 新着情報コーナーの変更・・・昨年に引き続き、新着情報を見えやすい工夫を行った。

3) 教員用HPの立ち上げ・・・武山研究室、母性・小児看護学講座、成人看護学講座の運用を見守りつつ、さらに新規立ち上げ希望を確認した。

4) 大学紹介・学生生活紹介用のDVDに関する方法の検討・・・5分程度の短いDVDを作成してはどうかとなり、作成に必要なパソコンや動画ソフトの購入の準備をすすめた。

5. 外部の広報媒体の活用

テレビ金沢による「ぶんぶんセブン」に本学の学生や教員が紹介番組に出演した。平成29年12月3日（日）7:00～7:30に放映された。石川県が運営する看護情報サイトのナースナビへの掲載が決定し、石川県立看護大学の特徴的な授業風景の撮影、学生・教員のインタビューを行った。

6. 大学案内（学部・大学院）

- 1) 2018（学部・大学院）の企画立案・編集・発行 大学院生の写真撮影を行った。
- 2) 2019（学部・大学院）の企画立案・編集

7. 大学コンソーシアム石川

1) 情報発信部会

- ・第1回 平成29年 5月12日（金）委員長出席
- ・第2回 平成29年 10月25日（水）欠席
- ・第3回 平成30年 1月10日（水）委員長出席

2) 事業内容

- (1) 広報事業：「大学コンソーシアム石川概要」、「石川の大学ガイドブック」等、発行協力
- (2) 石川県高大連携セミナー事業
- (3) 出張オープンキャンパス事業 担当講師の調整と依頼、実績は県内3校、県外2校
- (4) 学都石川情報発信事業
県外進学説明会
高校訪問 本学は受験生や在学生のいる高校訪問 栃木県、群馬県、千葉県6校

8. 学生広報委員活動のサポート

- 1) オープンキャンパス 学生の意見を取り入れた運営に取り組む、アンケート実施
- 2) 石川県の大学のガイドブック 本学の学生広報委員会の学生を起用、
- 3) 高校生向けの広報チラシを学生広報委員会の協力を得て『MyColor』を発刊した。

9. メールマガジン登録システム構築

メールマガジンへの登録を呼びかける。3月末現在99名登録
毎月、掲載したい内容について事務局担当者が募集、メールマガジンの内容充実が課題

10. 海外研修時の受け入れ先やMOU締結大学等への訪問時用の大学広報Goodsの活用

昨年度作成した広報Goodsを有効活用継続、平成30年度には新規の希望あるが、予算獲得が課題。

11. 高校訪問時に活用するPRチラシ『地域包括ケア時代に看護を学ぶなら石川県立看護大学』を作成し、活用した。更に、高校教員に関心を持ってもらえる広報が今後の課題。

12. 平成29年度広報委員会活動総括

平成29年度は2年間の委員会の活動計画に従って活動した。新たな広報戦略は試みたが、魅力あるHP等の改訂には至らず、教員の活動のPRや学生の授業や課外活動を伝える有効な大学広報戦略に向けてダイナミックな活動が期待されると考える。

広報委員会は役職者が中心で企画案や広報活動の周知、原稿執筆などには機動力があるが、実際の作業や準備などの広報活動には事務局の負担などが大である。HP作成やDVD作成に秀でた部署・スタッフの確保が課題である。

4.4.1.8 入学試験委員会

委員長：石垣 和子（教授（学長））

委員：武山教授（附属地域ケア総合センター長）、長谷川教授（学生部長）、濱教授、
牧野教授（研究科長）、林教授、垣花准教授、中田准教授、出村事務局長

事務局：松本専門員

活動内容：

1. 前年度の実績および問題点・課題等

前年度は委員構成・事務局メンバーが変わり、確実かつ円滑な入試の実施を担保することに気がつけた。その結果、各入学試験の学生募集、実施準備、当日運営、合格発表にいたる一連の事務作業は堅実に行なえた。

2. 今年度の目標

- 1) 各入学試験の募集、実施準備、当日運営、合格発表にいたる一連の事務作業を確実・円滑に実施する。
- 2) 県内及び近隣県に看護系大学の増加が見込まれることから、受験生の確保に留意する。
- 3) 作問体制について作問委員に周知し、適切な作問、採点を保証する。
- 4) 高大接続改革に伴う入試改革を行うための情報を収集する。
- 5) 入試評価に必要なデータを集め評価する。
- 6) その他の入試委員会が担当する作業を確実に行う。課題を発見し、その解決につなげる。

3. 今年度の活動内容・その評価

- 1) 各入学試験の募集、実施準備、当日運営、合格発表にいたる一連の事務作業はほぼ円滑に実施できた。新たな委員構成での委員会活動も2年目に入り順調であった。
- 2) 県内に看護系大学が新たに開設されたが、受験生数及び合格者の入学手続き率も通常と変わらなかった。次年度には隣県にも開設予定があり、気持ちの引き締めが必要である。
- 3) 今後の受験生の確保には広報委員会、教育研究審議会と連携し、高校訪問やチラシ作成、ホームページの改善が必要である。
- 4) 入試改革WGと連携して高大接続入試改革に対応する必要がある。それには正確で最新の情報が必要であるが、平成29年度は主として情報収集に力を入れた。
- 5) 作問体制について作問部会長が試験ごとの作問委員長を支援しながら作問にあたった。問題作成の時間管理が予定通りに運ばず、問題印刷、封入などにおいて、作問部会長にしわ寄せが行く状況が生じた。

- 6) 高大接続改革に伴う入試改革を行うため、高校の進路指導教員との意見交換会を開催し、時間不足ではあったが有意義な意見交換ができた。

日 時：2017年8月8日

場 所：石川県立看護大学大会議室

参加者：24校の高校教員、大学の入試委員

- 7) 助産師養成課程が大学院に新設されたことを受け、学内選抜及び学外選抜を新たに行なった。

4. 次年度以降に向けた課題・発展

- 1) 作問部会長の負担を軽減する。
- 2) 文部科学省の主導のもと、高大接続改革に伴う入試改革が具体化されようとし始めているため、さらなる情報収集が必要である。
- 3) 次年度から、助産師養成課程の学内選抜に加えて助産に限定せず博士前期課程の学内選抜を行なうことを決めた（研究科委員会）。それによって入試の機会が増えることから、実施体制を見直して安全・確実と実施負担のバランスを取る必要がある。
- 4) これまでこの委員会とは切り離して行なってきたキャリア支援センターの入試の実施体制をこの委員会で扱ってゆく方向性で検討する。

4.4.1.8.1 入試実施部会

部 会 長：非公開

部 会 員：非公開

活動内容：

1. 看護学部入学試験の準備・実施体制およびそれに付随する業務
2. 研究科入学試験の準備・実施体制およびそれに付随する業務
3. 大学入試センター試験の会場準備・実施体制およびそれに付随する業務

4.4.1.8.2 入試評価部会

部 会 長：非公開

部 会 員：非公開

活動内容：

以下について検討した。

1. H28年度卒業生の選抜方法と入学後の成績との関係に関すること
2. H28年度およびH29入学生の選抜方法と修学状況との関係に関すること
3. H28年度およびH29入学生の選抜方法のうち面接評価方法と修学状況との関係に関すること
4. 全国の国公立看護系大学の入試選抜方法のうち面接試験に関すること

4.4.1.9 自己点検・評価委員会

委 員 長：石垣 和子（教授（学長））

委 員：浅見特任教授（アカデミックアドバイザー）、武山教授（附属地域ケア総合センター長）、多久和教授（年報部会長）、大木教授（公大協研究員）、長谷川教授（学生部長）、丸岡教授（学長補佐兼附属看護キャリア支援センター長）、西村教授（附属図書館長）、

牧野教授（研究科長）、村井教授（教員評価部会長）、川島教授（学長補佐）、林教授（FD
委員長）、出村事務局長

委員補助：田村助教、金子助教、南堀助教

事務局：平村主任主事

活動内容：

1. 前年度の実績及び問題点・課題

- 1) 自己点検評価報告書の骨子を作成し、分担して執筆した。（評価対象年:H27年度、発行年:H29年夏）
- 2) 次の認証評価受評の準備（評価対象年:H30年度、資料執筆及び提出:H30年度、現地調査:H31年度）（大学基準協会による受評を予定）
- 3) 学生による授業評価の活用の検討
- 4) 職位ごとの教育力、研究力の標準化の検討開始
- 5) 複数年にわたる教員の個人評価方法及びそのフィードバック方法の検討を開始した。

2. 今年度の活動とその評価

- 1) 計画的に議題を調整し、隔月に委員会を開催した。
- 2) 認証評価年（7年ごと）だけに行ってきた自己点検評価を隔年に行なう方針に変更したことを受け、28年度を対象とした自己点検評価報告書を作成した。報告書作成に終わり、点検するには至らなかった。29年度が認証評価年に当たるため、この報告書を活用して大学基準協会に提出する報告書を作成することとした。
- 3) 教育の内部質保証への取り組みが求められる社会的状況に鑑み、教育の受け手から授業や学生支援の評価を得るため、在学生アンケート・卒業生アンケートを作成した。年度末の2月に全在学生にWeb調査協力を依頼したが、回収率が悪かったため、次年度に延長することとした。卒業生アンケートは紙媒体調査に切り替えて次年度に行なうこととした。
- 4) 休止中であった部会（教員評価部会、年報部会）を復活させて2年目となり、教員評価部会は従前の評価のプロセスを改善の上、進行管理しつつ、複数年評価の案を作成して委員会の審議にかけた。年報部会は自己点検評価報告書を通常の年報記事に合体させて年報を発行した。

3. 次年度以降に向けた課題

- 1) 認証評価受診のための自己点検評価報告書の作成
- 2) H29年度から石川県公立大学法人が打ち出したIRの充実を受け、本委員会で検討してきた実績や評価の数値化をそれに充てる。
- 3) 教育の質保証のための調査の方法や項目の改善、調査結果の評価
- 4) 職位ごとの教育力、研究力の標準化の検討と教員の複数年評価の試行

4.4.1.9.1 教員評価部会

部会長：村井 嘉子（教授）

部会員：今井教授、林教授、松田総務課長（適宜参加）

活動内容：

平成28年度の教員評価の実態について精査、その過程における課題の対応策について検討し、全学的に周知し、平成29年度評価を実施した。一次評価結果に対する不服申し立て関わる再評価報告書のフォーマットを作成し、再評価の実態が明確になるようにした。

平成28年度実施に引き続き、教員活動評価の複数年評価を採用している公立大学の情報収集を行い、それを土台に本学の教員活動複数年評価を採用する内容（案）を作成した。次年度に複数年評価に関する事項を確定し、平成32年度より試行できるように準備する。

4.4.1.9.2 年報編集部会

部会長：多久和 典子（教授）

部会員：塚田准教授、川村講師

事務局：平村主任主事

活動内容：

平成28年度の年報 第17巻を発行した。また、平成29年度年報の編集作業を迅速化するため、昨年改定した教員研究活動記録の記入にあたっての留意事項を確認し、委員会報告等のフォーマットをわかりやすく表示して周知した。

4.4.1.10 FD委員会

委員長：林 一美（教授）

委員：多久和教授、加藤准教授、木森准教授、北山准教授、金谷講師

委員補助：曾山助教、松本助教

事務局：松本専門員

活動内容：

1. FD研修会

FD研修会は前期1回、「第1回石川県立大学との合同FD研修会」を学外で開催した。

1) 学外FD研修会

(1) 第1回FD合同研修会

8月8日に本学と県立大学主催FD合同研修会を「学生の学びを活かす授業改善」のテーマでおこなった。本学からは30名の教員参加者があった。両大学教員が合同でグループワークを行い、授業改善に関する意見交換を行った。研修会アンケートでは、研修内容について94%が満足・やや満足、今後の活用については、77%が活用できるという結果であった。

(2) FDに関する他大学等の先進的取り組みの情報収集

①初年次教育学会主催「医歯薬看護系におけるアクティブラーニングの実践と展開」のパネルディスカッションにおいて、本学実行委員会（FD委員会・教務委員会）が運営した。本学の取り組みを報告するとともに、県内医歯薬看護系4大学の関係者と情報交換・共有を図った。

②日本看護系大学協議会（JANPU）主催「実習指導にあたる教員のFD企画ワークショップ」や玉川大学主催「学習成果の可視化とFD活動」に出席したFD委員が、FD委員会で伝達講習をして、今後のFD活動について検討をした。

2. 授業評価アンケート結果の検討

H28年授業評価結果の授業評価の評点1・2の低得点の分布を、H29年度4月の教員全体会議で提示し、教員全体に前期授業改善を呼びかけた。後期は引き続き、授業評価の評点1・2の低得点の分布を前期と後期を比較した。その結果は、授業について、理解の低い学生は減っているが、授業の進め方については改善が見られなかった。教員全体会議で結果提示をした後、学生に授業改善についての聞き取り調査をした。聞き取り内容をまとめ、全学教職員にメール配信した。教員に対しては、聞き取り内容のまとめをもとに大講座毎に「教育改善」に関する意見交換をおこなうよう依頼した。

3. 新任教職員オリエンテーション

29年度新任教職員 6名に対し、2回にわたりオリエンテーションを実施した。

4.4.1.11 ハラスメント委員会

委員長：石垣 和子（教授（学長））

委員：小林教授、丸岡教授（学長補佐兼附属看護キャリア支援センター長）、
西村教授（附属図書館長）、阿部准教授、谷本准教授、出村事務局長

相談員：武山教授（附属地域ケア総合センター長）、川島教授（学長補佐）、中田准教授、
塚田准教授

活動内容：

1. 前年度の実情及び問題点・課題

前年度はハラスメント事案が発生し、会議を3回開催して調査・審議を行ない、グレーゾーンであると結論付けた。申し立て者への支援と、被申し立て者の自覚と改善を今後見守る必要がある。

2. 今年度の目標

- 1) ハラスメントを予防するような学習環境、職場環境を醸成し、前年度のような事案の発生を予防する。
- 2) ハラスメント事案が発生した場合には、ハラスメント防止規定に従い、適切に対応する。
- 3) ハラスメント防止規定の見直しを行い本学にふさわしいハラスメント防止規定を作成する。

3. 今年度の活動内容・その評価・次年度に向けた課題

- 1) 委員会に対するハラスメント申し立てではなく、ハラスメント相談員、学生相談員を交えた拡大委員会を3月に開催してハラスメントの現状についての情報交換を行なった。
- 2) ハラスメント相談員、学生相談員にも特には相談がなかったことが明らかになった。
- 3) 申し立てはなかったが、1事例について複数の相談がハラスメント委員に寄せられたことを受け、そのようなタイプのハラスメント（教員⇒学生）を防止するためのチラシ作成を提案し、内容を検討した。継続して検討することになった。
- 4) 「石川県立看護大学キャンパス・ハラスメントの防止等に関する規程」の見直しについては次年度に検討することとなった。

4.4.1.12 情報セキュリティ委員会

委員長：今井 美和（教授）

委員：加藤准教授、北山准教授、川村講師、出口特任講師、曾根助教、渡辺助手

事務局：澤本主幹

活動内容：

1. 情報セキュリティに関する研修の実施

1) 新任教職員対象 4月3日

「石川県公立大学法人情報セキュリティポリシー（平成24年1月）」「情報セキュリティに関する10ヶ条 2009.6.11」について説明した。

2) 全教職員対象 11月29日

「石川県公立大学法人情報セキュリティポリシー（平成24年1月）」「情報セキュリティに関する注意事項、簡単なパソコン操作、用語」について説明した。さらに、「情報セキュリティの問題事例とその対応」を紹介し、「Windows Updateの自動更新の設定」を依頼した。

2. 情報セキュリティに関する注意事項の検討

- 1) 日常的に教職員や学生の情報セキュリティ対策の意識を高める目的で、「石川県公立大学法人情報セキュリティポリシー（平成24年1月）」や「本学情報セキュリティ問題事例と対応の報告」「情報セキュリティに関する設定状況の報告」に基づいて標語の作成を検討した。

4.4.1.13 コンプライアンス委員会

委員長：多久和 典子（教授）

委員：牧野教授（研究科長）、林教授、木森准教授、出村事務局長

事務局：納橋専門員

活動内容：

倫理委員会との連携の重要性に鑑み、研究倫理研修会を両委員会共催により7月6日（木）に開催した（参加者：教員及び大学院生計53名）。平成29年4月よりCITI Japanから事業を継続したAPRIN（Association for the Promotion of Research Integrity:一般財団法人公正研究推進協会）に本学は法人本部を通じて引き続き機関登録しており、新任教員の受講を確認するとともに大学院生に受講を奨励し、さらなる研究倫理の推進を確認した。なお、学生については、委員会で協議した結果、APRINへの登録を見送ることとなった。

4.4.1.14 倫理委員会

委員長：牧野 智恵（教授（研究科長））

委員：今井教授、長谷川教授（学生部長）、加藤准教授、中田准教授、塚田准教授、外部委員（9名）

事務局：杉本主任主事

活動内容：

1. 委員会開催状況

- 1) 平成29年度も学長が委嘱した2名の外部委員の参加を得て、計11回の委員会を行った（1回の委員会に2名の外部委員が出席）。
- 2) 今年度は、個人情報保護法等の改正に伴い、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の一部改正が平成29年5月30日施行となったことから、主な改正点を確認した。
主に、本学の倫理申請書と審査基準の見直し、研究データの保存方法、対応表の作成と提出先の検討、迅速審査の申請方法・審査基準の作成について委員会で数回にわたり検討し、学外講師による研修会を実施するとともに、共有フォルダーに各書類を設置し倫理審査の環境を整えた。また、学外からも本学の倫理審査についてわかるよう、本学のホームページへの各書類のアップを検討し、次年度早々に整備することとした。
- 3) 平成29年度の通常申請数は、教員 18件、前期課程生 10件、後期課程生 6件、卒業論文 21件、迅速審査12件(3件減)で合計 67件であった（H28年度は59件）。審査の結果は、承認20%（昨年9%）、条件付き承認73%（昨年84%）、変更の勧告5%（昨年7%）、不承認0%（昨年0%）、非該当2%（昨年0%）であった。条件付承認は、修正された申請の再審査で、90%が承認となった。
- 4) 平成29年7月6日(木)にコンプライアンス委員会と合同研修会を開催した。本年度は、まず、個人情報保護法の改正に伴い、変更の内容について、学外の講師を招き講演を実施し、その後、申請書の修正箇所の説明と今年度記入漏れの目立つ箇所を示し、本学教員および大学院生（計53名）に説明した。
- 5) 新年度に向けて、卒業研究や大学院生の申請がスムーズに実施できるように、「倫理審査申請書提出の際の注意事項」を共有フォルダーに置き、メールで教員に周知した。
迅速審査の対象を次の2点とした。①研究計画書の軽微な変更に関する審査（調査期間・施設の変更、対象人数の拡大その他）、②卒業研究のうち、本学の学生・教職員を対象とし、精神的侵襲を伴わない調査書を用いた研究。
- 6) 委員会開催中の待機について審議し、メールで教員に周知した。
倫理審査の際、申請内容について説明を求める場合があるため、研究代表者または共同研究者は、倫理委員会開催予定時間内は必ず連絡のつく場所で待機してもらうこと。また、学外にいる場合は、提出書類のみでの審議とし、書類不備の場合は「変更の勧告」となる場合がある旨をメールにて周知した。

4.4.1.15 衛生委員会

委員長：今井 美和（教授）

委員：大木教授、川村講師、川端助教、子吉助教、出村事務局長、井上囑託、中川産業医
事務局：平村主任主事

活動内容：

1. 職場巡視

6月21日（水）、11月8日（水）、3月14日（水）に校舎の設備や衛生状態について職場を巡視した。
なお、巡視前には職員からもメールにて情報を収集した。

2. 定期健康診断

「教職員保健だより」やメールにて職員に受診を勧奨し、受診状況を調査した。

3. 時間外労働

7月に職員に労働時間に関する質問紙調査を行った。その結果、時間外業務時間の増加、休憩時間を確保できない割合の増加、年休取得率の低下、振替休日の取りにくさ、健康不安の増加、労働時間や仕事と生活のバランスに対する満足度の低さなどがみられた。衛生委員会では「自分の時間外労働について考えよう 働き過ぎて疲れていませんか？」のリーフレットを改めて職員に周知した。

4. ストレスチェック

法人の指示に従い、7月にストレスチェックを実施し、職員に受検を勧奨した。

5. 消防体制と避難訓練

- 1) 本学の消防体制の整備は、衛生委員会ではなく防火管理者を中心に行うものである。衛生委員会においては防火管理者の管理のもとで消防避難訓練を行うことを確認した。
- 2) 消防避難訓練（地震対応訓練を含む）の実施 7月18日（火）
学生及び職員約330名が参加した。

6. 敷地内全面禁煙

禁煙宣言から1年経った6月30日（金）にメールにて職員に再度周知した。

7. 労働安全衛生研修会の実施 11月29日（水）15：00～16：00

「労働安全衛生についての取り組み」「職場巡視報告・職員定期健康診断受診状況」「労働時間に関する実態調査」について報告し、中川産業医が「食事について」の講演を行った。

8. 環境マネジメント活動

公立看護単科大学の活動状況を調査した。

4.4.2 特設委員会

4.4.2.1 大学改革委員会

委員長：丸岡 直子（教授（学長補佐兼看護キャリア支援センター長））

委員：牧野教授（研究科長）、村井教授、出村事務局長

活動内容：

1. 今年度の活動内容

今年度は、学部カリキュラム改訂班、大学院・専攻科検討班、教員組織改編班の検討内容の情報交換を行うことを中心に活動し、3班の検討状況を確認した。

学部カリキュラム改訂の検討が進められ、その内容の理解をより深めるため教員全体会議で進捗状況を説明する機会を設けた。

教員組織改編は学部・大学院カリキュラムの改訂と連動するため、学部カリキュラム改訂班と教員組織改訂班を合体した組織編制とすることを提案し、次年度から大学改革委員会は2班で検討をすすめることとなった。

2. 次年度以降に向けた課題・発展

引き続き、2班の検討内容や改訂にむけた進捗状況の情報交換を行う。

4.4.2.1.1 カリキュラム改定班

班 長：村井 嘉子（教授）

班 員：長谷川教授（学生部長）、小林教授、垣花准教授、中田准教授、木森准教授、
北山准教授、織田准教授、桜井准教授、谷本准教授、市丸講師、金谷講師、中道講師
事務局：山岸専門員

活動内容：

本委員会では、平成31年度からの学内カリキュラム改訂をめざして、平成28年から今年度末までに会議を継続し、改定案を作成した。その過程において3ポリシーとの整合性の検討、『看護学教育モデル・コア・カリキュラム』を参考にした。各分野、各科目の位置づけ、必修科目及び選択科目のバランス、看護師保健師養成指定規則、本学の学生課題の解決の対応策、卒業単位数などについて、丁寧に検討した。

今後、時間割構築、学修が遅れている学生（過年度生）への対応等、平成31年度よりスタートできるように計画的に検討を行った。

4.4.2.1.2 大学院・専攻科検討班

班 長：牧野 智恵（教授（研究科長））

班 員：西村教授（附属図書館長）、林教授、濱教授、亀田教授（9月から）、塚田准教授、
石川准教授、米田准教授、曾山助教、松本助教、大江助教

事務局：寺沢教務学生課長、納橋専門員

活動内容：

1. 大学院助産師養成課程新設の準備

1) 大学院助産師養成課程の検討WGによる、申請書類の検討

(1) 大学院での助産師養成課程の立ち上げに向けて、昨年度に引き続き検討を行った。メンバーは、委員長（牧野教授）、濱教授、西村教授、米田講師、曾山助教、寺沢課長、納橋専門員とした。なお、9月からは、助産師養成課程を中心的に担う亀田教授にも参加いただいた。

(2) 平成30年春からの教育開始に向けて準備を行った。法人本部および県との調整を図りながら、12月下旬から本格的に急ピッチでWGによって申請書作成の準備を行った。

(3) 文部科学省への申請および、教育環境の調整

学長、研究科長、教務学生課長、濱教授、亀田教授を中心に、申請書類の作成を行った。7月に文部科学省からの正式な設置の承認が届き、その後は、シラバスの作成、実習施設への最終調整、非常勤講師の調整、学内院生室・実習室の整備にとりかかった。

2) 入試方法の検討

大学院助産師養成課程で、優秀な入学者を確保するために、どのような入試方法が必要かについても検討し、研究科委員会での審議を依頼した。

2. 大学院でのプライマリー NPのニード調査および意識化

1) WGでの検討

昨年度に引き続き、本学大学院でのプライマリー NP教育の必要性について、WGを立ち上げ、検討した。WGメンバーは、林教授、石垣学長、牧野教授、塚田准教授、桜井准教授、石川准教授、松本助教、大江助教である。今年度は、3回（8月、12月、3月）の班会議を行った。内容は、学長裁量による研究で「大学院プライマリケア看護カリキュラム構築のための基礎研究」の結果を受け、今後、能登地域でのNPの必要性やどのように行政等の理解を得るか、また、どのような分野の教育を行うかについて検討を行った。本学では「精神看護に力を入れたNP」を輩出する方向で考えていくこととなった。今後は、何をどのくらい特徴付けていくか、科目をどうするかを考えていく。

4.4.2.1.3 教員組織改編班

班 長：丸岡 直子（教授（学長補佐兼附属看護キャリア支援センター長））

班 員：武山教授（附属地域ケア総合センター長）、西村教授（附属図書館長）、
牧野教授（研究科長）、村井教授、林教授、中田准教授、田淵助教、金子助教、千原助教、
大西助手、浅見特任教授

事務局：杉本主任主事

活動内容：

1. 前年度の実状および問題点・課題等

魅力ある大学の将来を実現するための検討ワーキンググループとして班が編成され、その目的を班員と共通理解することから検討を始めた。教員組織の改編は、学部カリキュラムの改訂や高度実践看護師育成を中心とした大学院の新たな研究教育分野の検討と密接に関連するため、他の2つの班の動きおよび、医療・福祉の動向や看護学教育の動向にも注視していくことを課題とした。

2. 今年度の目標

今年度も、引き続き学部カリキュラム改訂班と大学院検討班の動向を注視していく。さらに、平成24年度の大学基準協会における大学認証評価における教員組織に対する評価内容において、大学が求める教員像や教員組織の編成方針の策定を望む指摘がなされており、引き続き検討する。

3. 今年度の活動内容・その評価

1) 求める教員像の検討

教育理念・教育目標およびカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーの則った教育に向き合う姿勢、専門領域にふさわしい教育力とその向上、大学運営・大学改革への貢献などの内容について検討した。

2) 教員組織の編成方針の検討

法令や規程に準拠し、学部・大学院の3ポリシーを実現するための教員組織であること、教育研究の責任の所在が明確であり、その水準を維持向上できること、教員の業績を適正に評価することなどを盛り込む編成方針を確認した。

- 3) 求める教員像(案)および教員組織編成方針(案)を教育研究審議会での審議依頼を行った。
- 4) 教員組織の構成に関する検討
学部カリキュラムの改訂も検討段階であり、具体的な組織改編への検討には至っていない。

4. 次年度以降に向けた課題・発展

- 1) 「求める教員像」および「教員組織の編成方針」は教員組織改編班として内容をまとめ、学内の合意がすすめ、公表する。
- 2) 次年度には、学部カリキュラム改訂が具体化することが見込まれることから、その内容が達成できる教員組織について検討する。

4.5 平成29年度 卒業研究論文題目一覧

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目
人間科学領域 (13人)	池本美有紀	タッチングに関する研究で明らかとなった課題についての文献レビュー
	梅村 遥	歩く健康づくりが高齢者の形態や体力に及ぼす短期的な効果
	笠井 桃花	近年米国で行われている乳がん検診受診率の向上に向けた取り組みについての文献検討
	角村 莉奈	精神疾患をもつ患者が地域で家族とともに暮らしていくための支援
	北野 来弥	児童虐待防止マニュアルの内容分析—養護教諭の視点から—
	木村 將太	農業を生業とする中山間地域に住む高齢者の健康状態—歩行能力に関連する因子に焦点を当てて—
	西村 陸	路面性状の違いによる歩行中の膝への衝撃加速度の変化
	平光 水城	路面の性状によるウォーキング効果の違い
	藤崎 真実	中強度以上の身体活動量が高齢者の全身持久力に及ぼす影響
	本江 優香	外国人看護師候補者受入れ制度の現状と課題
	益谷 友佳	沈黙時間と友人関係のあり方が沈黙の捉え方に及ぼす影響
	山田 志織	わが国の看護分野における脳死臓器移植に関する研究
	若狭 淳美	救急領域における終末期患者家族に対する看護師の支援についての文献検討
健康科学領域 (13人)	加藤 美里	看護系女子大学生が行った女子高校生への子宮頸がん予防啓発活動2017の効果—1年生の分析—
	飯田真一朗	看護学生のコミュニケーション能力の実態
	井上 舞香	性周期に伴う嗜好性の変化と睡眠との関連性
	垣内 文菜	性周期に伴う嗜好性の変化と月経痛との関連性
	加藤 英里	性周期に伴う嗜好性の変化とエネルギーバランスとの関連性

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目
健康科学領域 (13人)	桑原まりあ	看護系女子大学生が行った女子高校生への子宮頸がん予防啓発活動2017の効果—啓発活動2015または2016を経験した2年生と3年生の分析—
	塩谷 咲希	三次元マトリクス環境が筋芽細胞の分化に及ぼす影響についての研究
	階戸 瑠奈	看護学生の生活習慣とセルフケアの認識と実態
	中川 拓哉	新人看護師の継続した二交代制勤務のための援助についての文献検討—三交代制勤務との比較と今後の課題—
	濱 一稀	看護系女子大学生が行った女子高校生への子宮頸がん予防啓発活動2017の効果—啓発活動2015および2016を経験していない2年生と3年生の分析—
	筆 奈緒子	筋細胞の分化におけるビタミンDの効果—二次元・配向性を有する3次元シャーレ上での培養条件での検討—
	前田 野衣	コラーゲンが筋芽細胞の分化に及ぼす効果について
	山本真菜美	看護大学生の自己効力感の実態と必要とされる支援
看護専門領域 基礎看護学 (11人)	太田美紗貴	懐かしい音楽の聴取が脳活動に及ぼす影響
	光林 美穂	高齢者における車椅子乗車時の移送速度の違いによる心拍・自律神経系への影響
	竹野 菜々	患者の在宅療養移行期を支える看護の実態 (第一報) —医療上の課題に焦点をあてて—
	立田恵梨子	看護学生による、心臓の超音波検査技術習得過程—下大静脈計測に要する時間—
	玉川千夏子	看護学生による心臓の超音波検査技術の正確性評価
	出嶋 莉子	患者の在宅療養移行期を支える看護の実態 (第二報) —生活上の課題に焦点をあてて—
	中嶋咲也子	心機能評価に用いる超音波診断装置教育プログラムに対する看護学生の意識
	西野 雛	高齢者における車椅子乗車時の移送速度の違いによる心理的变化との関係
	丹羽 絞香	懐かしい音楽の聴取が脳活動に及ぼす影響
	山田 実穂	高齢者における車椅子乗車時の車椅子移送速度の違いによる眼球運動への影響
	横山 操	懐かしい音楽の聴取が脳活動に及ぼす影響

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目
看護専門領域 母性看護学 (5人)	川之上莉央	緊急母体搬送時の妊産婦の心理と看護についての文献検討
	木村紗也夏	不妊治療終結過程における女性の心理と必要な支援
	新谷里沙子	精神疾患をもつ妊産婦に対する妊娠期からの継続的な育児支援についての文献検討
	中野 愛美	10代母親への支援の実際—2007～2017年の文献検討—
	中村 佳穂	産後の乳房緊満に応じた効果的なケアとケアに対する評価についての文献検討
看護専門領域 小児看護学 (7人)	浦根 希実	NICUを退院した低出生体重児をもつ母親の育児不安・困難感と関連要因に関する文献検討
	太田悠以奈	子ども虐待予防に関する看護師の認識と医療機関の予防システムに関する文献研究
	岡本 麗	病気をもつ子どもの学校生活における困難とその支援に関する文献検討
	木村 友香	父親が子育てで経験していることに関する文献検討 —多胎と単胎の比較文献を中心に—
	高橋 里帆	医療的ケアが必要な児の家族への支援についての文献検討
	新田 明里	学校における虐待対応に関する現状と今後の課題
	橋本 奈美	小児病棟での保育士の支援内容とその効果に対する文献検討
看護専門領域 成人看護学 (9人)	阿部 春菜	認定看護師による終末期がん患者と家族への看護実践
	勝泉 彩生	骨転移をもちながら疼痛・苦痛を緩和するための自己管理方法の文献的考察
	坂口 遥	AYA世代のがん患者の告知後の心理過程—手記を分析して—
	新田 三起	胃切術後患者の体重減少を最小限に抑えるために看護師が行っている食事指導の実態
	馬場 菜摘	セルフケア実施が困難な化学療法中の患者の看護 —がん看護専門看護師へのインタビューから—
	浜辺実乃里	がん患者の告知直後、再発直後における心理的危機に対する看護師の対応
	堀口 幸紀	母親患者の子供への思いに関する文献研究 —がん患者、その家族による手記を読んで—

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目
看護専門領域 成人看護学 (9人)	牧野日向子	自然災害における大学生が参画するボランティア活動の文献的考察
	山本菜津美	オストメイトの家族が感じる困難とその対処方法の実態
看護専門領域 老年看護学 (6人)	市野 由香	配食事業者によるICTを活用した在宅高齢者のリアルタイム見守りシステム構築に関する予備調査1 —家族の視点からの効果の検証—
	羽左間成美	配食事業者によるICTを活用した在宅高齢者のリアルタイム見守りシステム構築に関する予備調査2 —配食スタッフの視点からの効果の検証—
	平野 佑幸	認知症高齢者の楽しみや思い出を取り入れた笑いヨガプログラムの試み 第3報：GHにおける認知症高齢者とケアスタッフのストレス軽減効果
	福田 果奈	認知症高齢者の楽しみや思い出を取り入れた笑いヨガプログラムの試み 第2報：笑いヨガ実施が困難と予測された事例の参加状況
	古島 安夏	認知症高齢者の楽しみや思い出を取り入れた笑いヨガプログラムの試み 第1報：認知症高齢者の楽しみや思い出を取り入れた笑いヨガプログラムの作成
	細川 結貴	認知症高齢者を介護する男性介護者の介護負担と介護を継続できる要因 —男性介護者がよりよく介護するために—
看護専門領域 地域看護学 (7人)	稲田 美紀	メタボリックシンドローム発症の地域差と各地域における効果的な介入方法の検討
	河合 映歩	在日留学生の健康意識・行動の特徴 —食生活を中心とした考察—
	河合 良枝	働く母親に対する祖父母の育児参加の実態と祖父母教室へのニーズ
	木戸 仁美	在日留学生の健康意識・行動の特徴 —メンタルヘルスを中心とした考察—
	濱口 未夢	小児肥満についての文献検討 —生活習慣・家庭環境による影響から—
	藤沢 夏帆	高齢者の抑うつに関連する要因についての文献検討
	龍角友里香	在日外国人母親の異文化における育児体験 —困難と対処のプロセスに注目して—

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目
看護専門領域 在宅看護学 (6人)	酒井 裕香	在宅療養における介護者が時期別に抱いていた思いと家族へのケア —訪問看護師の手記を通して—
	新保 晶子	日中の足浴が夜間の睡眠に与える効果
	岩崎 文香	在宅看護学実習における看護学生の学びの特徴の一考察
	西野 実奈	へき地診療所医療者が捉えた看護の現状 —看護師からの聞き取り調査から—
	松本 侑子	へき地診療所医療者が捉える医療の現状 —医師の聞き取り調査から—
	与畑 拓哉	日中の足浴が夜間の睡眠に与える影響 —OSA睡眠調査票MA版を用いた主観的睡眠感の評価—
看護専門領域 精神看護学 (5人)	河崎 舞華	精神疾患を有する母親が妊娠・出産・育児をしていく中での問題や困難と支援の現状についての文献検討
	熊藤 春花	長期入院精神障害者への退院支援を促進するための看護師への教育体制の検討
	中瀬 瑞希	精神科訪問看護の実態と精神障がい者および家族のニーズについて —障害者福祉サービス利用者と家族会への質問紙調査から—
	橋本 百合	発達障害児を持つ親を支援していくための保健師の関わり方
	本城 あや	発達障害児の母親が抱える育児上の精神的苦痛の緩和に必要な関わり —ペアレントトレーニングの視点から—